

L.Pedanius EpictetusとC.Trocina Synecdemus

ーバルセロナのアウグスタレスの一断面ー

山 本 晴 樹

【要 旨】

通例アウグスタレスは都市の有力な解放奴隷から都市参事会によって任命されると考えられてきた。ところがL.Pedanius EpictetusとC.Trocina Synecdemusはその碑文が示すように明らかにバルセロナの周縁地域の奴隷出身であった。ここにはパトロネジが関係していたことは確かである。それと共に彼らのパトローヌスが属する氏族（地方名望家）相互の友人としての関係も重要であった。この友人関係はあらためて考察される必要がある。

【キーワード】

解放奴隷 アウグスタレス 地方名望家 パトロネジ 友人

はじめに

H.Mouritsenは2015年に出版した『ローマ世界における解放奴隷』（ペーパーバック版）⁽¹⁾のなかでアウグスタレス研究の動向に触れ、それを総括する困難さを指摘しながらも、次の二つの傾向を挙げている。一つは近年のアウグスタレス研究者の学説の曖昧さ（vagueness）であり、もう一つはアウグスタレス理解が「祭祀的」(cultic)なものから主に「社会的」(social)なものへ重点移行しているということであった⁽²⁾。

Mouritsenの挙げる二つの傾向のうち第一のものについては、筆者も思い当たるところがあった。というのもこれまで筆者は属州ナルボネンシスのアウグスタレスを手がけてきたのであるが、それに関する最近の研究であるL. Vandevoorde (2012) の論考を読んだとき、アウグスタレスについての新しいイメージをあまりいざいざすることができないもどかしさを感じたし、彼女がアウグスタレスをもっぱら都市に限定して分析する手法にあきたらなさをいただいたからでもあった。さらに彼女がブルデュー理論を持ち出す⁽³⁾にいたっては強い違和感を覚えた。そしてやはりアウグスタレス研究は都市内部に視野を限定しては展望が開けないのではないかという思いもしたのである。

Mouritsenの第二の傾向に関しては、O.OlestiとC. Carrerasが2013年に属州タラコネンシスのラエタニア地方を対象とした共同研究（Olesti et Carreras (2013)）を読んで納得した。両研究者はローマ帝政期スペイン東北部におけるバルセロナとその周縁地域（ラエタニア地方）を考古学の成果を踏まえたうえで、碑文学、地名学等を援用しながら考察しているが、その中でバ

ルセロナのアウグスタレスに触れ、周縁地域の奴隷から中心都市バルセロナのアウグスタレスへの社会的身分上昇という側面を明らかにした⁽⁴⁾。両研究者はこのようにして明らかにされたものを「社会景観」(le paysage social, social landscape)と呼んでいる。まさにアウグスタレス研究の「社会的」な関心を示すものと言えよう。

筆者はOlestiとCarrerasの手法はアウグスタレス研究に新しい方向を示すものではないかと考えている。それで以下では具体的に二人のバルセロナのアウグスタレスを取り上げ社会的な観点からのアウグスタレス研究の側面をみてみたい。その二人とはL.Pedanius EpictetusとC.Trocina Synecdemusである。彼らは二人ともバルセロナの周縁地域において奴隷としての痕跡を残しており、その後解放奴隷となり、バルセロナにあってはアウグスタレスに就任した。彼らにはバルセロナの中心部および周縁地域に顕彰碑が建立されている。以下この二人のアウグスタレスの軌跡を追うことによって、ローマ帝政期スペイン東北部のアウグスタレスにみる「社会景観」の一端を垣間見ることにしたい。

第一章 L.Pedanius Epictetus

スペイン東北部の中心都市バルセロナから北東15kmほどのところにローマ・ウィラ遺跡Teiàがある。そこは海拔93mのなだらかな斜面で、眼前にはコスタ・ブラバが開けている。この遺跡の発掘は2002年から断続的に数年にわたって行われ、ローマ時代のブドウ農園遺跡が現出した。現在ここは遺跡公園として整備されており、当時のブドウ搾汁場などが復元されている。またローマ時代のブドウの実験栽培も行われており、いわばローマ時代のワイナリーを展示する施設ともなっている⁽⁵⁾。

このTeià遺跡で2002年鉛製のsignaculum(印章)が出土した(図1)⁽⁶⁾。この印章には《Epicteti L(uci) P(edani) Clementis》、すなわち<L. Pedanius Clemensの(奴隷) Epictetus(の製品)>の銘が彫られており、おそらくドーリウムに刻印されたものと思われる。Epictetusはこのウィラの単なる奴隷ではなく、パトローヌスのL.Pedanius Clemensからこのウィラ産ワインのためのドーリウムの生産を任されたoffinator(生産指揮奴隷)⁽⁷⁾と思われる。このEpictetusは後に解放されてL.Pedanius Epictetusを名乗り、ついにはバルセロナの都市参事会によってアウグスタレスに任命されている。それを示す顕彰碑はバルセロナのかつてのフォルム(中央広場)近くで出土したものであるが、次のようなトラヤヌス期の碑文(IRC IV,106=CIL II,6155)を残している。

《L(ucio) [Pedani]o / [L(uci) l(iberto)] / Epicteto / IIIII vir(o)Aug(ustali) / Acilila Arethusa / marito / optimo / l(oco) d(ato) d(ecrionum) d(ecreto).》

<Luciusの息子でアウグスタレスのL. Pedanius Epictetusのために。Acilia Arethusaが最良の夫のために(建てた)。(バルセロナの)都市参事会決議によって与えられた場所に。>

ここからは、かつてウィラの奴隷であったEpictetusがパトローヌスのL.Pedanius Clemensにより解放され、L.Pedanius Epictetusと名乗り、その後バルセロナのアウグスタレスに就任したことが読み取れる。またEpictetusはAcilia Arethusaなるおそらく女解放奴隷と結婚し、死後彼



図1. Epictetusのsignaculum (Photo Ajuntament de Teià)

女によってこの顕彰碑が奉献された。奉献の場所はバルセロナの都市参事会が許可した場所、おそらくフォルム内であった。Epictetusの妻はアキリウス氏 (gens Acilia) に属し、この氏族はバルセロナの地方名望家 (ローカル・エリート) であった。したがってEpictetusの婚姻は共にバルセロナの地方名望家であるペダニウス氏とアキリウス氏との結びつきによるものでもあった。

さらに、Acilia Arethusaにはバルセロナ市内に2世紀前半の顕彰碑が建立されている (IRC IV,123 = AE 1957,28)。

《 Aciliae Are/thusae matri / Pedanius Cle/mens filius / et / Clemens Mini/cianus nepos / l(oco) d(ato) d(ecurionum) d(ecreto). 》

＜母Acilia Arethusaのために。息子Pedanius Clemensと孫Clemens Minicianusが(建てた)。都市参事会決議によって与えられた場所に。＞

この碑文によれば、L.Pedanius Epictetusと妻Acilia Arethusaには息子L.Pedanius Clemensがおり、孫にはL.Pedanius Clemens Minicianusがいた。息子は父親のパトローヌスの名前を引き継いでいる。そして孫のMinicianusはその名前から彼の母がMiniciaであることが推測される (IRC IV,p208)。とすればペダニウス氏に属するものがこれまたバルセロナの地方名望家であるミニキウス氏 (gens Minicia) に属する者と婚姻によって結びついていることになる。バルセロナの名望家に属する者同士の婚姻による結びつきの他の事例である。

IRC IV,106とIRC IV,123およびIRC IV,114を図示すれば図2のようになる ([↓]は解放、[]は血縁関係、[=]は婚姻関係を示す)。

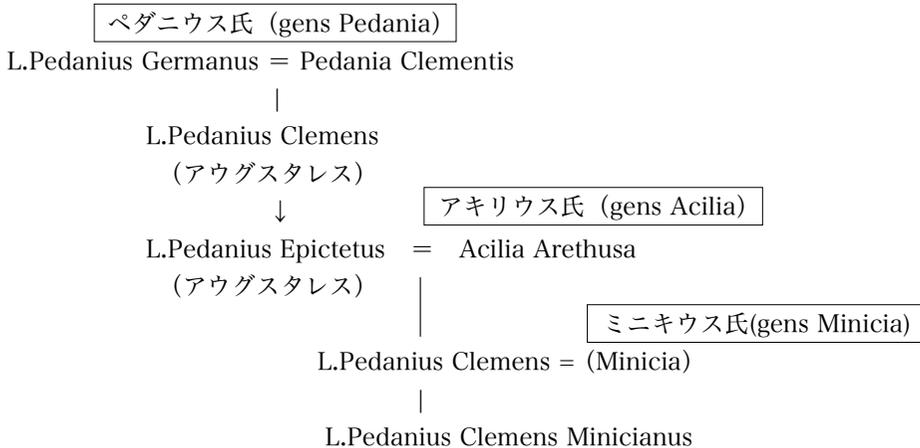


図2 ペダニウス氏とアキリウス氏およびミニキウス氏との関係図

EpictetusのパトローヌスであるL.Pedanius Clemensなる人物はバルセロナの顕彰碑にいくつか現れている。そのうち年代的に最も早いものはIRC IV,114で、それによれば1世紀末か2世紀初頭である。

《 [L(ucio) Pedanio? G]ermano / [Pedaniae? C]lementidi / [L(ucius) Pedanius? Clem]ens IIIIII(vir) Aug(ustalis) / [sibi et paren]tibus piissim(is) / [h(oc) m(onumentum) h(eredem, -eredes)] n(on) s(equentur). 》

＜L.Pedanius GermanusとPedania Clementisのために。アウグスタレスL.Pedanius Clemensが自身と最も敬虔なる両親のために (建てた)。この記念碑は相続人に引き継がれない。＞

この碑文から、アウグスタレスL.Pedanius Clemensの父親がL.Pedanius Germanusであり、母親がPedania Clementisであることが明らかとなる。息子のClemensのcognomen（家名）は父親ではなく母親のClementisに由来している。一般にcognomenは父親のそれが受け継がれるのであるが、ここでは母親に由来するものに変えられている。このことは父親のcognomenが奴隷出自を予測させる場合にはよく行われる慣行である。ここには解放奴隷の息子Clemensがアウグスタレスになった事例が現れている⁽⁸⁾。

L.Pedanius Clemensにはまた次の顕彰碑（IRC IV,107,108⁽⁹⁾、2世紀の第1四半期あるいは中葉）もある。

《L(ucio)Pedanio L(uci)lib(erto) / Euphroni / IIIII vir(o)Aug(ustali)/ Primus et / Agathopus lib(erti)/ L.Pedanius Clemens / in memoriam L(uci)Pedan(i)/ Euphronis cuius basis / lapidea aere clusa vetustate / erat corrupta statuam eius / marmoreae superposuit / permittente ordine / Barcinonensium.》

＜ルキウスの解放奴隷でアウグスタレスの L.Pedanius Euphron のために。解放奴隷 (L.Pedanius) Primusと (L.Pedanius) Agathopusが (建てた)。L.Pedanius Clemens は L.Pedanius Euphronの思い出に対して、青銅で覆われた古びた台石の上に大理石の彼の彫像を設置した。バルセロナの都市参事会の許可によって。＞

ここでは、Clemensは亡くなったおそらく彼の解放奴隷と思われるアウグスタレスの Euphron⁽¹⁰⁾のために、Euphronの解放奴隷であるPrimusやAgathopusとともに顕彰碑を修復し、彼の彫像を建立している。建立の時点でClemensはアウグスタレス職経験者であったであろうから、アウグスタレス職がパトローヌスから彼の解放奴隷へ引き継がれていることも考えられる⁽¹¹⁾。

ところで、Epictetusが所属していたウィラであるTeiàという名称はCarreras et Olesti (2013)によれば、fundus Atilianus が中世に語頭音消失 (aphérèse) によってTalianoになったことに由来することが指摘されている (p.176)。そしてAtilianusの名称はこの地域を所有していたL.Pedanius Atilianus (後述) から派生するとしている。とすればこの地域はペダニウス氏の地所であり、Teiàで出土したsignaculumに現れるEpictetusはペダニウス氏の所有するバルセロナ周縁地域ウィラの奴隷出身であったことは疑問の余地はないであろう。

いずれにせよL.Pedanius Epictetusはウィラの奴隷出身であり、L.Pedanius Clemensなるパトローヌスによって解放されて、Clemensのウィラ経営を任せられ、それによって得た資産およびパトローヌスからの遺産相続⁽¹²⁾により財力を蓄え、地方名望家のペダニウス氏の一員としてバルセロナの都市参事会によってアウグスタレスに任命されたという経歴が想像される。

ペダニウス氏がバルセロナにおいて、とりわけ2世紀に有力な地方名望家であることは残された碑文からも明らかである⁽¹³⁾。IRC IVに収録されたペダニウス氏関連の5つの碑文でそれを見よう。

(1) L.Pedanius Pal. ou Gal. Aemilianus (IRC IV,67=AE 1957,33、トラヤヌス・ハドリアヌス期)⁽¹⁴⁾

彼は、バルセロナの按察官 (aedilis)、二人委員 (duovir) を2度、および皇帝礼拝祭司 (flamen divorum et Auguti ou -ustorum) を歴任した。母親はAemilia Furianaであるので、彼の父はバルセロナの地方名望家アエミリウス氏 (gens Aemilia) に属する女性と婚姻関係をもった。

(2) L.Pedanius L.f.Atilianus (IRC IV,68 = CIL II,4529、2世紀中葉か後半)⁽¹⁵⁾

彼はバルセロナの按察官 (aedilis) を務めた。父親はL.Pedanius Paternusで、母親はAtilianusのcognomenから推測すればAtiliaであろう。アティリウス氏 (gens Atilia) もバルセロナの地方名望家である。すでに述べたようにTeià遺跡の名称はこの氏族の名前に由来して

いる。なおAtilianusの妻はPomponia Phileteで、ポンポニウス氏 (gens Pomponia) もまたバルセロナの地方名望家である。

(3) L.Pedanius L.f. Clemens Senior (IRC IV,69 = AE 1957,36、2世紀の前半あるいはむしろ中葉)⁽¹⁶⁾

彼はバルセロナのすべての公職を歴任し、タラゴーナの監察官 (quinquennialis) でもあった。

(4) L.Pedanius L.f. Ursus (IRC IV,70 = AE 1957,30、時期不明⁽¹⁷⁾)⁽¹⁸⁾

彼はバルセロナの都市参事会員であった。

(5) L.Pedanius Narcissianus (IRC IV,132 = AE 1966,214、2世紀)⁽¹⁹⁾

15年と52日で夭折した息子L.Pedanius Narcissianusのために父親L.Pedanius Narcissusが奉献した石碑である。この石碑はバルセロナの都市参事会決議によって与えられた場所に建立された。生前Narcissianusはいかなる都市公職に就任しなかったにもかかわらずである。ここには父Narcissusがバルセロナの最大の地方名望家ペダニウス氏の一員であったことが大きく影響していると思われる。ペダニウス氏のバルセロナにおける権勢を如実に示す事例であろう。これら5つの碑文から、ペダニウス氏に属する者たちがバルセロナの都市参事会員、按察官、二人委員、皇帝礼拝祭司、バルセロナのすべての公職そしてタラゴーナの監察官を歴任していることがうかがえる。特徴的であるのはペダニウス氏の一員が他の地方名望家の氏族の一員と婚姻関係を広範に取り結んでいることである⁽²⁰⁾。この地方名望家である氏族相互の結びつきをどうとらえるかが問題であるが、氏族内部のパトロネジとは異なる、氏族間相互のなんらかのつながりを考える必要があるように思われる。

IRC IV, p.105はバルセロナのペダニウス氏について次のように総括している。「ペダニウス氏 (Pedanii) の解放奴隷が繁栄し、アウグスタレスに到達するのはフラウィウス期末である。一方、110年から130年の間にはすでにローマ市民であるかれらの子供は都市の公職に達している。そして150年以後はわれわれの情報の急速な枯渇が生じている。」

最後にペダニウス氏について補足しておく。R.Symeによれば⁽²¹⁾バルセロナの最有力地方名望家であったこの氏族の系譜の中には、トラヤヌス・ハドリアヌス期のローマ元老院議員Cn.Pedanius Fuscus Salinatorがいる。彼はパトリキ貴族であり、118年ハドリアヌス帝とともに正規執政官に就任したがその後急逝した。遺児フスクスは祖父がハドリアヌスの義兄のセルウィアヌスであり、母親がその娘であったことから、ハドリアヌスの養子候補と目されたこともあったものの、最終的には祖父セルウィアヌスとともに死に至らしめられることになる⁽²²⁾。このことからすれば、ペダニウス氏のなかには首都ローマで元老院議員家系の一員として皇帝になりうる可能性をもつに至っていた者もいたことになる。

第二章 C.Trocina Synecdemus

第一章で取り上げたバルセロナのアウグスタレスL.Pedanius Epictetusの奴隷としての痕跡はバルセロナの周縁地域のTeià遺跡で出土したsignaculumのみであったが、これに対して、これから述べるバルセロナのアウグスタレスC.Trocina Synecdemusの場合は前者と異なり、奴隷としての痕跡として多くのアムフォラ銘がバルセロナの周縁地域に残されている。D.Gorostidi (2013)によれば、《SYNE》銘および《SYN》銘が刻印されたアムフォラが、バルセロナの西方23kmに位置し、Llobregat河口に近いSant Vicenç dels Hortsの遺跡で発見されており、25事例が報告されている (p.284 Fig.69)。この場所はこのアムフォラ銘の人物Synecdemusが属していたfiglina (瓦窯)⁽²³⁾の所在地であり、彼はそこでアムフォラ製造に従事する奴隷あるいはむ

しろそれを指揮するofficator（生産指揮奴隷）であった⁽²⁴⁾。なお《SYN/SYNE》銘は1992年、コルシカ島の北方沖に位置するLa Giraglia島近海で沈没した船からも発見されている⁽²⁵⁾。

Synecdemusはその後トロキナ氏（gens Trocinae）に属するC.Trocina何某によって解放されC.Trocina Synecdemusと名乗ることになる。彼に対しては顕彰碑がバルセロナ南西約20kmの地にあるCastelldefelsで発見されている。それに彫られた碑文(IRC IV,112、二世紀の第2四半期中葉)が以下である。

《C(aio) Trocinae / C(aii) lib(erto) / Synecdemo / IIIII vir(o) Aug(ustali) / Valeria Haline / marito optimo》

＜ガイウスの解放奴隷でアウグスタレスのC.Trocina Synecdemusのために。Valeria Halineが最良の夫のために（建てた）。＞

この顕彰碑はSynecdemusの妻Valeriaがバルセロナのアウグスタレスであった夫のためにおそらく夫の死後この顕彰碑を奉獻している。解放奴隷のSynecdemusはここではバルセロナの地方名望家であるトロキナ氏の一員になっている。そしてこの氏族の後ろ盾により、バルセロナのアウグスタレスに就任したと思われる。またSynecdemusはこれまたバルセロナの地方名望家ウアレリウス氏（gens Valeria）に属する女解放奴隷Valeria Halineと婚姻関係を結んでいる。この関係もやはりトロキナ氏とウアレリウス氏との地方名望家相互の結びつきから生じたものであろう。

Synecdemusの顕彰碑の写真（IRC IV,112 Pl. LIX; Gorostidi(2013)p.288 Fig.70）によれば碑文は顕彰碑正面の上半分には彫られており、下半分は空白である。通例バルセロナのアウグスタレスの顕彰碑文は石碑正面の全面に彫られており、末尾は《I(oco) d(ato) d(ecurionum) d(ecreto)》すなわちく（バルセロナの）都市参事会決議によって与えられた場所に＞という銘で終わっている。従って、Synecdemusの顕彰碑は公的なもの（バルセロナのフォルム内に設置される）ではなく、私的なものであろう。

この顕彰碑が私的なものであるならば、それが設置された場所はCastelldefelsにあるトロキナ氏の地所内であろう。Synecdemusは元来トロキナ氏のウィラのあるCastelldefelsの北方15kmにあるSant Vicenç desl Hortsの地のfiglinaで、アムフォラ製造に従事する奴隷であった。その後、解放され地方名望家トロキナ氏の一員としてバルセロナの都市参事会に承認され、ついにはアウグスタレスに就任した。その顕彰碑が死後トロキナ氏の地所内に建立されたということは、この地所の一部を恐らく相続によって所有するようになったものと思われる。これはバルセロナ周縁地域の奴隷・解放奴隷からバルセロナのアウグスタレスへ、そして最終的にはおそらく土地所有者へと急激な社会的身分上昇をとげた事例であろう。

GorostidiはSynecdemusの生涯を次のように描く⁽²⁶⁾。Synecdemusが生まれた年代は明確ではないが、彼は7、8歳ころから働きはじめ、15～20歳ごろバルセロナの周縁地域であるSant Vicenç dels Hortsのfiglinaで、officatorとして《SYN/SYNE》銘アムフォラを製造する。その時期は20～30年代で、ティベリウス期（14-37）に当たる。コルシカ島北方沖のLa Giraglia島近海の沈没船内で発見された《SYN/SYNE》銘アムフォラはこのfiglinaで製造されたものと思われる。Synecdemusは60～70歳まで40年間にわたりSant Vicenç de Hortsのfiglinaでアムフォラ製造を行う。その間パトローヌスから解放されC.Trocina Synecdemusと名乗り、パトローヌスの死後その相続人として遺産を分与される。彼はバルセロナの地方名望家であるトロキナ氏の一員として活動し、それにより1世紀後半（フラウィウス期）にバルセロナの都市参事会によってついにアウグスタスに任命される⁽²⁷⁾。Gorostidiは彼の死亡時期については明確にしていない。Gorostidiによれば、Synecdemusには奴隷仲間、同じくトロキナ氏に属し、フラウィウス

期にアウグスタレスとなったOnesimusなるものがいたことを指摘している。ただGorostidiはOnesimusの奴隷としての痕跡については触れていない。Onesimusには以下の二つの顕彰碑がバルセロナに残されている。

(1) IRC IV,110 (建立時期はIRC IV,111より以前)

《C(aio) Trocin[ae] / C(ai) liberto / Onesimo / IIIII vir(o) Aug(ustali) / Philetus lib(ertus) / heres ex t(estamento).》

＜ガイウスの解放奴隷でアウグスタレスのC. Trocina Onesimusのために。(彼の)解放奴隷で相続人のPhiletusが遺言により(建てた)。＞

ここではトロキナ氏⁽²⁸⁾に属する解放奴隷であるC.Trocina Onesimusが、彼の解放奴隷であるPhiletusによりこの顕彰碑を奉献されている。PhiletusはOnesimusの解放奴隷にして相続人とされていた。おそらく遺言によりOnesimusの遺産の一部を相続したものと思われる。この碑文の写真(Pl.LVIII; Gorostidi(2013)p.292 Fig.72)を見ると、C.Trocina Synecdemusの顕彰碑(IRC IV,112)と同様、顕彰碑正面の上半分しか碑文は彫られておらず、しかも末尾に《L・D・D・D》銘を欠いているので、Philetusが私的に建立したものと思われる。また碑文の文面から顕彰碑の建立時期はパトローヌスであるOnesimusの死後である⁽²⁹⁾。

(2) IRC IV,111=AE 1957,31 (2世紀の第2四半期中葉)

《C(aio) Trocinae / C(ai) lib(erto) / Onesimo / IIIII vir(o) Aug(ustali) / C(aius) Trocina / Philetus l(ibertus) / t(estamento) p(oni) i(ussit) / C(aius) Trocina / Paramythius heres posuit / l(oco) d(ato) d(ecurionum) d(ecreto).》

＜ガイウスの解放奴隷でアウグスタレスのC.Trocina Onesimusのために。(彼の)解放奴隷C.Trocina Philetusが遺言によって(この顕彰碑が)設置されることを命じた。相続人であるC.Trocina Paramythiusが設置した。(バルセロナの)都市参事会決議によって与えられた場所に。＞

この顕彰碑は末尾に《L・D・D・D》銘があるので公的なものであり、おそらくフォルム内に建立された。時期は先の顕彰碑(IRC IV,110)より後で、Philetusの死後であり、建立そのものは彼の相続人である解放奴隷Paramythiusによってなされた。このことからすればParamythiusはOnesimusではなくPhiletusの解放奴隷であろう。Gorostidi(2013)はOnesimusをSynecdemusおよび第一章で述べたEpictetusと同時代人とし、三者ともアウグスタレスに就任したのはフラウィウス期(69-96)とみなしている(p.294)。

Onesimusはさらに先に述べたL.Licinius Secundusなるアウグスタレスに対して顕彰碑を奉献している(IRC I,125=CIL II,4553、107年～110年)⁽³⁰⁾。

《L(ucio) Licinio / Secundo / accenso / patrono suo / L(ucio)》 Licin(io) Surae / primo secund(o) tertio consul(atu) / eius IIIII vir(o) Aug(ustali) / Col(oniae) I(uliae) V(rbis) T(riumphalis) Tarrac(onis) / C(oloniae) F(aventiae) I(uliae) A(ugustae) P(aternae) Barcin(onis) / C(aius) Trocina / Onesimus / amico.》

＜L.Licinius Secundusのために。(彼は)パトローヌスであるL.Licinius Suraの第一回目と第二回目と第三回目のコンスル就任時の側近(であり)、植民市タラゴーナと植民市バルセロナのアウグスタレス(であった)。C.Trocina Onesimusが友人のために(建てた)。＞

SecundusのパトローヌスL.Licinius Sura(c.56-c.108)はトラヤヌスの皇帝即位に際して中心的な役割を果たし、彼の友人として重用されたローマ元老院議員である。Suraは補充コンスルを一回(c.97年)、正規のコンスルを2回(102年と107年)務めた⁽³¹⁾。その際SecundusはパトローヌスであるSuraの側近(accensus)であった。さらにSecundusはタラゴーナとバルセ

ロナの二都市でアウグスタレスを歴任した。属州タラコネンシスのアウグスタレスで彼ほどの地位に上ったものは知られていない。このSecundusに顕彰碑を奉獻したのがC.Trocina Onesimusであった。注目すべきはOnesimusが友人 (amicus) として奉獻していることである。タラゴナーとバルセロナのアウグスタレスであったL.Licinius Secundusに対しては他に類をみないほど多くの顕彰碑が友人たちによって奉獻されている⁽³²⁾。この「友人」(amicus) の意味するものについては今ここで論じる用意が筆者にはない。稿を改めて検討する必要があると考えている⁽³³⁾。

C.Trocina Onesimus (=Honesimus) の墓碑がイタリア北部沿岸のGenua (現ジェノヴァ) で確認されている。以下がその碑文 (CIL V,7767) である。

《D. M. / C.Trocinai / Honesimi / L.Pedanius Ursus / amico in/comparabili / b(ene) m(erenti) f(ecit).》

<C.Trocina Honesimusの死者たちの霊へ。L.Pedanius Ursusが比類なき友として相応しい者のために建てた。>

バルセロナのアウグスタレスであったC.Trocina Onesimusの墓碑である。L.Pedanius Ursusが友人のために奉獻している。この墓碑が発見された場所はCIL V,7767の注によればジェノヴァ中心部の聖ロレンツォ教会付近である。注目すべきは、トロキナ氏に属するOnesimusとペダニウス氏に属するUrsusとが北イタリア沿岸都市で交友関係をもっていることである。両氏族は共にバルセロナの地方名望家であった。このことは第一章で取り上げたEpictetusの属するペダニウス氏の一員が第二章で取り上げたSynecdemusの属するトロキナ氏の一員と北イタリアのジェノヴァで友人同士であったということになる。

これまで、D.Gorostidiの論考によりながら、SynecdemusおよびOnesimusについて見てきた。彼らはバルセロナの周縁地域における奴隷仲間、その後解放されトロキナ氏に属し、そしてフラウィウス期にバルセロナのアウグスタレスとなった。彼らもまた第一章でみたEpictetusと同様パロトヌスとのつながり (パトロネジ) のなかで「figlinaからforumへ」(Gorostidi) という社会的身分上昇を遂げたわけである。そのなかでOnesimusが友人としての結びつきによっても他の地方名望家の氏族に属するものとのつながりをもっていたことに注目しなければならない。この「パトロネジ」と「友人としての結びつき」という二つの関係が相互に絡み合うことによってバルセロナとその周縁地域における「社会景観」(Olesti et Carreras) は形成されているのではないかとも思われるからである。

おわりに

従来アウグスタレスはともすれば都市の解放奴隷出身とみなされがちであった。しかし今回Epictetus およびSynecdemusの事例をみるとあきらかにその出自は都市の周縁地域にあり、その地のウィラあるいはfiglinaの奴隷・解放奴隷から中心都市のアウグスタレスへと社会的身分上昇を遂げている。そこには彼ら自身の能力ももちろん介在したが、しかしその身分上昇を実現させたのは彼らのパロトヌスとのつながり (パトロネジ) であった。とりわけパロトヌスが地方名望家の一員であればより一層その社会的地位は上昇した。EpictetusとSynecdemusの場合にそのことは明白であった。解放奴隷にとってのパトロネジの重要性があらためて認識されねばならないだろう。

それとともにいまひとつ注目しなければならないのは、EpictetusとSynecdemusの婚姻関係をみていくなかで現れてきた、氏族相互のつながりである。これが具体的にどのようなものであるかは難しい問題であるが、それにひとつの展望を与えるのが「友人」(amicus)の役割であろう。「友

人」という結びつきはこれまで政治的な場では問題になっても、このような社会的な場で取り上げられることは少なかったのではなからうか。その意味で他に類をみないL.Licinius Secundusとその「友人たち」との関係は見落とされてはならないだろう。この関係を考察することによってあらためて《amicus》の意味するものが明らかになるように思われる⁽³⁴⁾。

【註】

- (1) Mouritsen(2015). ハードバックの出版は2011年。
- (2) Mouritsen(2015)p.250f.
- (3) Vandevoorde(2012)p. 413f.
- (4) Olesti et Carreras(2013)pp.180 - 182.
- (5) Teià遺跡公園の詳細についてはMartin i Oliveras (2013) を参照されたい。
- (6) このsignaculumの寸法は縦3,5cm、横6,6cmである。このsignaculumとともにセステルティウス貨幣も出土している。その貨幣の表側銘は《IMP CAES NERVAE TRAIANO AVG GER DAC P M TR P COS V P P》、すなわち<イムペラトル・カエサル・ネルヴァ・トラヤヌス・アウグストゥス・ゲルマニクス・ダキクス、最高神官、護民官職権(保持者)、執政官五回目、国父のために>であり、裏側銘は《CONGIARIVM TERTIVM》すなわち<三回目施与>である。Rodà et alii(2007)p.204によれば、表側銘のコンスル職就任回数から103-111年の間、裏側銘から107年の鑄造が推定されている。何れにせよトラヤヌス期(98-117)である。セルテルティウス貨幣の図像はRodà et alii(2007)p.203参照。
- (7) officinatorについては以下を参照されたい。馬場典明(2020) 106 - 146頁(第一部第三章 2, 3世紀の大土地所有に於ける解放奴隷(初出は『歴史学・地理学年報』V(1981)57-100頁))。
- (8) 公的生活における解放奴隷とその息子については、Mouritsen(2015)pp.261-275参照。
- (9) IRC IV,107とIRC IV,108の内容は同一である。
- (10) IRC IV,103によればL.Pedanius Euphronは、第二章で述べるタラゴーナとバルセロナのアウグスタレスであったL.Licinius Secudusに友人として顕彰碑を奉獻している。
《L(ucio) Licinio / [S]ecundo / [a]ccenso / [p]atron(o) suo / [L(ucio) Li]cin(io) Surae pri/[m]o secund(o) tert(io) / [co]nsulat(u) / eius / [IIII]I vir(o) Aug(ustali) / Col(oniae) I(uliae) / [V]rbis T(riumphalis) Tarrac(onis) et C(oloniae) / [F]aventiae I(uliae) A(ugustae) P(aternae) Barcin(onis) / [- - -]ius F ou Eu[- - -] / - - - - -》<L.Licinius Secundusのために。(彼は)パトローヌスであるL.Licinius Suraの第一回目と第二回目と第三回目のコンスル職の時の側近(であり)、植民市タラゴーナと植民市バルセロナのアウグスタレス(であった)。()が()のために(建てた)。> IRC IV, 103の注では最後から二行目を《[Pedani]us Eu[p]hron?》と補い、最終行を《amico》と推測している。筆者はSecundusに対するamicusによる他の顕彰碑(IRC IV,91-92,94-98)から判断して、この補読と推測は妥当だと思う。とするならば、ペダニウス氏の一員がタラゴーナとバルセロナのアウグスタレスであるL.Licinius Secundusの友人であることになり、属州タラコネンシスの地方名望家であるリキニウス氏(gens Licinia)の一員と友人として結びついていたことを示している。
- (11) 図2でみるように、EpictetusはClemensの解放奴隷であり、かつアウグスタレスであるので、ここでもアウグスタレス職がパトローヌスから彼の解放奴隷へ引き継がれているとも考えられる。
- (12) パトローヌスからの遺産相続による解放奴隷の資産蓄積とそれによる社会的身分上昇をsponsored mobilityとしてとらえて、パトローヌスから独立した解放奴隷によるcontest mobilityと対比させるMouritsenの指摘についてはMouritsen(2015) p.278参照。
- (13) Rodà et alii(2005)p.47によれば、ペダニウス氏関連の碑文はバルセロナ全体で5%を占めるという。
- (14) 《[L(ucio) Pe]danio / [P]al(atina) ou [G]al(eria) tribu / [Ae]miliano / [ae]dili IIvir(o) II(iterum) / [f]am(ini) divor(um) / et Aug(usti ou -ustorum) / Aemilia Furiana / mater / filio piissimo.》<L.Pedanius Pal. ou Gal. Aemilianus 按察官、二人委員二度、神格化された皇帝たちおよび現皇帝(たち)の祭司のために。母Aemilia Furianaが最も敬虔な息子のために(建てた)。>
- (15) 《[L(ucio) Peda]nio L(uci) f(ilio) Atili[ano a]edili cui L(ucius) [Pe]d(anius) / Paternus pater / [st]at[uam] ou eius / [p]o[n]endam destina[ve]rat heredes Iul[ius] / [Eu]tychianus Peda[ni]i / [I]renicus et Irene /

- [P]omponia Philete / [u]xor voluntati / [ei]lus satisfecerunt / [l](oco) d(ato) d(ecurionum) d(ecreto).》
 <按察官L.Pedanius L.f. Atilianus のために父 L.Pedanius Paternusが 彫像を設置することを定めた。相続人Iulius Eutychnianus、Pedanius IrenicusとPedania Irene、妻Pomponia Phileteは彼の意向を満足させた。(バルセロナの)都市参事会決議によって与えられた場所に。>
- (16)《Asphal[es....] / L(ucio) Ped(anio) L(uci) fil(io) Pal(atina tribu) / Clementi Seniori/omnib(us) honorib(us) / in re p(ublica) sua Barcin(one) / functo et q(uin)q(uennali) Col(oniae) / I(uliae) U(rbis) T(riumphalis) T(arraconis) Ped(ania) Cle/mentiane patri pi(issimo) ponendam destinaverat / Ped(anii) Sacerdos / et Ianuaria he/redes eius patrono /posurerunt / l(oco) d(ato) d(ecurionum) d(ecreto). 》<安らかならんかな！自己の都市共同体バルセロナで全ての公職に就任し、植民市タラゴーナの監察官であったL.Pedanius L.f.Pal. Clemens Seniorのために。Pedania Clementianeが最も敬虔な父のために設置することを決定した。相続人であるPedanius Sacerdosと (Pedania) Ianuariaが彼らのパトローナ (Pedania Clementiane) のために設置した。(バルセロナの) 都市参事会決議によって与えられた場所に。>
- (17) IRC IV,69,123,127と同時に発見され、顕彰碑の製造も同じ工房なので2世紀の前半あるいはむしろ中葉と思われる。
- (18)《L(ucio) Pedanio / L(uci) fil(io) Urso / decurioni Col(oniae) / Barc(inonis) Pedania / Dionysia filio piissimo / l(oco) d(ato) d(ecurionum) d(ecreto).》<ルキウスの息子L.Pedanius Ursus、植民市バルセロナの都市参事会員のために。Pedania Dionysiaが最も敬虔なる息子のために (建てた)。(バルセロナ) の都市参事会決議によって与えられた場所に。>
- (19)《L(ucio) Pedan(io) / Narcissia/no ann(orum) XV(quindecim) / d(ierum) LII (quingenta duorum) L(ucius) P(edanius) / Narcissus / fil(io) dul(cissimo) /l(oco) d(ato) d(ecurionum) d(ecreto). 》<L.Pedanius Narcissusのために。(彼は)15年52日(生きた)。L.Pedanius Narcissusが最愛の息子のために(建てた)。(バルセロナの) 都市参事会決議によって与えられた場所に。>
- (20) ここであげたもの以外にペダニウス氏の一員がファビウス氏 (IRC IV,163 [2世紀後半か末]) およびポルクウス氏 (IRC IV,204 [2世紀末]) の一員とも婚姻関係を結んでいる。次の二つの事例がある。(1) IRC IV,163=AE 1992,301 :《D. M. / Fabia Ferriola / Pedanio Dionysio fec(it) mari/to b(ene) m(erenti) et sibi.》<死者たちの霊へ。Fabia Ferriola が夫に相応しきPedanius Dionysiusのために、そして自分自身のために (建てた)。> ここではペダニウス氏の一員とファビウス氏の一員との間に婚姻関係がある。(2) IRC IV,204=AE 1972,306 :《D. M. / Porcia File/teni / Ped(anius) Iucudus / vxori b(ene) m(erenti)》<死者たちの霊へ。Porcia Fileteのために。Pedanius Iucundusが妻に相応しき者のために (建てた)。> ここではペダニウス氏の一員とポルクウス氏の一員との間に婚姻関係がある。なおポルクウス氏のなかにはスペイン東北部において製陶業を営んでいたものがある。これに関しては馬場典明氏の論考を参照されたい。馬場典明(2020) 374 - 387頁 (第三部第二章第二節《M・PORC》銘アムフォラの生産と流通一属領型葡萄酒アムフォラの一事例一 (初出は『西洋史学論集』XXX(1992) 29-41頁))。
- (21) Syme (1958) p.480 n.1, p.604 n.4, p.794 . なおIRC IV p.103ではCn.ペダニウス・フスクス・サリナトルのバルセロナ出身説は根拠なしとして否定的であるが、彼がペダニウス氏に属し、いわゆる「スペイン系」の元老院議員であることは疑いない。
- (22) ペダニウス・フスクス・サリナトル父子については南川高志氏の論考 (南川高志 (1995) 218頁、227 - 229頁) を参照されたい。
- (23) figlinaについては馬場典明氏の論考を参照されたい。馬場典明 (2020) 30-71頁 (第一部第一章 >OPVS DOLIARE<の生産規模 >FIGLINA<と>OFFICINA< (初出は『《OPVS DOLIARE》考(1) — 帝政初・中期に於けるローマ工業と大土地所有制 —』『史淵』CX(1977) 67-96頁))。
- (24) Morena,Olesti i Carreras(2010)はこの人物がofficinatorかあるいはinstitor (支配人) であったのではないかと推測している(p.71)。InstitorについてはGaius IV,71(ガイウス、船田享二訳『法学提要』有斐閣 1967年259-260頁)参照。
- (25) Marlier et Sciallano(2008) p.125f.,p.128 Fig.20(Gi 97-1),p.129 Fig.21(Gi 97-1).
- (26) Gorostidi(2013)p.290にはSynecdemusの生涯の概念図が掲載されている。
- (27) 彼がアウグスタレスに就任するのは60~70歳代とされておりかなり高齢であるが、Gorostidiはメリダ (Merida) のアウグスタレスQ.Aeifulanus Q.lib. Pasphorusが85歳で亡くなった事例をあげている。Gorostidi(2013)p.290 n.13ではAE,1976,p.188と表記されているが正しくはAE 1967,188である。

- (28) AE 1957, 31 (=IRC IV,111 (後述)) の注によればTrocinaの名称の起源はエトルリアとされている。Cf.IRC IV, p.196 n.387.
- (29) 後述の顕彰碑 (IRC IV, 111) の年代が2世紀の第2四半期かあるいは中葉とされているので、それ以前であろう。
- (30) この顕彰碑はバルセロナから北東25kmに位置するSant Andreu de Llavaneresで発見された。
- (31) PIR. 253: L.Licinius Sura(p.61f.). L.Licinius Suraについては南川高志氏の論考 (南川高志 (1995) 139-140頁) を参照されたい。
- (32) Cf. IRC IV,91(=CIL II,4540);92(=CIL II,4542);94(=CIL II,4543);95(=CIL II,6149);96(=CIL II,4544);97(=CIL II,4545);98(=CIL II,4546).
- (33) ちなみにOlesti et Carreras(2010)は《amicus》が単なる「友人」ではなく、「友人」のウィラの経営に関与する場合もあることを示唆している(p.77)。一方、イタリア南部沿岸都市の事例からではあるがD'Arms (1981) は奉獻者が被奉獻者との血縁関係をもたない場合に《amicus》という表現が使われたのでないかと指摘している(p.145.)。
- (34) これに関してD'Arms(1981)がその著書のなかで、「ローマのいくつかの港湾都市の社会構造はヒエラルヒーよりもcontinuum (連続体) としてより正確に叙述される」(p.148) ことを指摘しているのは示唆的である。

Bibliographie

- D'Arms (1981) : J.H.D'Arms, *Commerce and Social Standig in Ancient Rome*, Cambridge U.P.
- Gorostidi(2013):D.Gorostidi Pi, Sobre le marques SYN/SYNE i la seva identificació amb C.Trocina Synecdemus, sevir Augustal de la colònia de Barcino, in Carreras, C., Berni, P., *Barcino II: marques i terrisseries d'àmfiores al territorium*. Institut d'Estudis Catalans; [Tarragona]: Institut Català d'Arqueologia Clàssica, pp. 287-296 (file:///C:/Users/owner/Downloads/Sobre_les_marques_SYN_SYNE_i_la_seva_ide.pdf).
- Marlier et Sciallano(2008) : S.Marlier et M.Sciallano, L'épave à dolia de l'île de la Giraglia(Haute-Corse), in : *Archaeonautica*,15, p.113-151, (<https://doi.org/10.3406/nauti.2002.919>).
- Martin i Oliveras (2013): A.Martin i Oliveras, Cella Vinaria Archaeological Park (Teià-Maresme-Barcelona). A Great Experimental Archaeology Laboratory. In Foulds, F.W.F (Ed.), *Experimental Archaeology and Theory. Recent approaches to archaeological hypotheses* Oxfod Books Ltd., Oxford, U.K., pp 67-100(file:///C:/Users/owner/Downloads/CELLA_VINARIA_Project_and_Archaeological%20(2).pdf).
- Morera, Olesti i Carreras (2010) : J.Morera, O.Olesti i C.Carreras, Centres de producció amfòrica i territorii a la riba dreta del Llobregat: novetats de la terrisseria del Mercat (Sant Vicenç dels Horts), *Pyrenae* 41/2 (2010),p.49-79(file:///C:/Users/owner/Downloads/revista_pyrenae.pdf).
- Mouritsen(2015) : H.Mouritsen,*The Freedman in the Roman World*, Cambridge U.P.
- Olesti et Carreras(2013) : O.Olesti et C.Carreras, Le paysage social de la production vitivinicole dans l'ager *Barcinonensis* : esclaves, affranchis et *institores*, *Dialogues d'histoire ancienne* 39/2, p.147-189(file:///C:/Users/owner/Downloads/Olesti-Carreras%20(2).pdf).
- Rodà et alii(2005) : I.Rodà, A.Martin i Oliveras, C.Velasco i Felipe i R. Arcos i López, Personatges de Barcino i el vi laietà. Localització d'un fundus dels Pedanii Clementes a Teià (El Maresme) a partir de la troballa d'un signaculum de plom amb inscripció. (s. II de. C.) en *Quaderns d'Arqueologia i Història de la Ciutat de Barcelona* (QUARHIS) I, pp.46-57(file:///C:/Users/owner/Downloads/Personatges_de_Barcino_i_el_vi_laieta.Pdf).
- Rodà et alii (2007): I.Rodà; A. Martín i Oliveras, i C. Velasco i Felipe. Cella Vinaria de Vallmora (Teià, Barcelona) un modelo de explotación vitivinícola intensiva en la Layetania, Hispania Citerior (S.Ia. C. - S.Vd.C.). *Histria Antiqua* 15, p.195-211(file:///C:/Users/owner/Downloads/CELLA_VINARIA_de_Vallmora_Teia_Barcelona.pdf).
- Syme (1958) : R.Syme, *Tacitus*, Oxford.

Vandevorde(2012) : L.Vandevorde, Augustales and Decuriones. Sixteen inscriptions from Narbonese Gaul, *Latomus* 71, pp.404-423(file:///C:/Users/owner/Downloads/Augustales_and_Decuriones_Sixteen_Inscri%20(3).pdf).

IRC I : G. Fabre, M. Mayer, I. Rodà (eds), *Inscriptions romaines de Catalogne I*. Barcelone (sauf Barcino), Paris 1985,

IRC IV : G. Fabre, M. Mayer, I. Rodà (eds), *Inscriptions romaines de Catalogne IV*. Barcino, Paris 1997.

馬場典明 (2020) : 『ローマ大土地所有制研究』九州大学学術情報リポジトリ (<https://doi.org/10.15017/4103493>)

南川高志 (1995) : 『ローマ皇帝とその時代—元首政期ローマ帝国政治史の研究』創文社

謝 辞

Teià遺跡出土のsignaculumの写真掲載を許可されたイサベル・ローダ前バルセロナ自治大学教授に謝意を表したい。また教授からは筆者が2015年3月に同大学を訪問した際、IRC I (1985) とIV (1997) をいただいた。この二冊の碑文史料集なしには筆者はこの小論を執筆することはできなかった。重ねて同教授に感謝を申し上げたい。

mot clef

libertus sevir Augustales local elite patrociniū amicus

résumé

On dit que des affranchis influents dans la ville sont nommés par le décurion en tant que sévir augustal. Cependant les sévirs augustaux L.Pedanius Epictetus et C.Trocina Synecdemus sont originaires de la territoire de Barcelone, comme leurs inscriptions l'expliquent. Dans ce cas-là le relation des patrons avec ses affranchis est très important pour la promotion sociale. Mais aussi important est le relation mutuel des patrons qui sont local elite dans la ville. On doit envisager de nouveau cette liaison sociale qui est également appelée l'amitié(*amicitia*).

remerciements

Je profondément remercie Madame la Professeur Isabel Rodà de Llanza de me permettre d'utiliser la photo de signaculum et ensuite de m'avoir donné IRC I(1985) et IRC IV(1997), quand je l'avais rencontré à l'Université autonome de Barcelone en 2015. Sans ces deux livres je n'ai pas pu rédiger mon article.